

## 「御国」と関連する「聖なる都エルサレム」

### ベレーシート

● 「アブラハム、ダビデ、イエシュアという名前に共通していることは何でしょうか。」と質問されて、「エルサレム」と答えることのできる人は、神のご計画についてかなり学んでいる方です。詩篇 132 篇 13~14 節に、「主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。』」とあるように、エルサレムは、神がこの地上においてご自身の名を置かれるために、唯一選ばれた永遠の都です。しかも、神の主権によって建てられる都です。「エルサレム」は神のご計画においてきわめて重要な位置を占めています。なぜなら「エルサレム」は、メシア・イエシュアがこの地上で王として治める「御国」のセンターとなる場所だからです。大和(ヤマト)が日本の雅名(がめい)であるように、「シオン」は「エルサレム」の雅名です。



● 「エルサレム」という語彙は、旧約の中で 927 回、新約では 140 回使われています。合わせると、何と 1067 回です。「エルサレム」の雅名である「シオン」は、旧約で 161 回、新約では 7 回。合わせると、168 回です。「エルサレム」(シオン)は神のヴィジョンの中心です。メシア王国、永遠の新しい地における中心的な場所であり、主にある私たちがやがて行くところでもあります。神はそのシオンに対する愛を以下のように語っています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 62 章 1~3 節

- 1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない。  
その義が朝日のように光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。
- 2 そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。  
あなたは、【主】の口が名づける新しい名で呼ばれよう。
- 3 あなたは【主】の手にある輝かしい冠となり、あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる。

● 上記の箇所にある「わたし」とは、預言者が神を代弁して、「あなた」である「シオン(エルサレム)」に対する愛と喜びをほとぼしるように語っている箇所です。しかもそのことが、同義的パラレリズムによって表現されています。

- ① 「シオンのために、わたしは黙っていない」 = 「エルサレムのために、黙りこまない」
- ② 「その義が朝日のように光を放つ(までは)」 = 「その救いが、たいまつのように燃えるまでは」
- ③ 「国々はあなたの義を見(る)」 = 「すべての王があなたの栄光を見る」
- ④ 「あなたは主の手にある輝かしい冠となる」 = 「あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる」

## 1. 「エルサレム」という名称に隠された神の秘密

### (1) 「エルサレム」の名称の一つの解釈

●ところで、「エルサレム」という語彙は、ヘブル語で「イエルーシャーライム」と言います。この語彙は二つのことばから成る合成語であると考えられます。一つは「イエル」(יְיִ)、「もう一つは「シャーローム」(שָׁלוֹם)の複数形「シャーライム」(שָׁלוֹמִים)です。ちなみに、「エルサレム」の「エル」を、神を意味する「イール」(אֵל)と解してエルサレムを「神の平和」としたり、町を意味する「イール」(עִיר)のことだと解して、エルサレムを「平和の町」だと誤解している方がおられます。しかし「エルサレム」のヘブル語表記が「イエルーシャーライム」(יְיִ שָׁלוֹמִים)だと知っていれば、そうした間違いはないはずです。

●「イエルーシャーライム」(יְיִ שָׁלוֹמִים)の前半の「イエル」(יְיִ)は、ヘブル文字の「ヨッド」(י)と「レーシュ」(ר)の組み合わせです。ヘブル文字にはそれぞれ意味があります。「ヨッド」は神の力ある御手を表わし、「レーシュ」は「頭、思考、考え、ご計画」を表わします。つまりこの二つの文字で「神のご計画」を意味し、この「イエル」(יְיִ)がもう一つの文字を伴うことで、以下のようないろいろな意味を持つ語彙になります。たとえば、

- ①「ヤーラド」(יָרַד)で、「(高い所から)降りて来る、下る、低くされる」
- ②「ヤーラー」(יָרָה)で、「投げる、(矢を)射る、教える、指し示す、(隅石)を置く、土台を据える」
- ③「ヤーラシュ」(יָרַשׁ)で、「所有する、占領する」

●以上のような意味合いをもった存在を「イエル」(יְיִ)で表わしていると考えられます。そして、後半の「シャーライム」(שָׁלוֹמִים)は「平和」を意味する「シャーローム」の複数形です。複数形は二倍の平和を意味し、二倍の祝福を得るのは常に長子ですから、「エルサレム」は町(都)の中でも「長子的地位」を有しているとも考えることができます。ヘブル語の「シャーローム」があらゆる領域における神の祝福の総称であり、平和、和解、繁栄、健康、知恵、心の安らぎ、勝利といった神の祝福を意味しているとすれば、「エルサレム」とは、**神のご計画をもった方が高い所から降りて来て、神のあらゆる祝福(シャーローム)を据える場所として、神が占領する(所有・支配する)ところ**という意味になります。これが「イエルーシャーライム」の私の見解です。このことがこの地上に実現するのは「千年王国」(メシア王国)においてであり、そのときまでは真の神の平和がこの世に訪れることはないのです。

### (2) 「エルサレム」の名称のもう一つ別の解釈

●ところが、最近読んだ本の中に私の見解とは異なる解釈があることを知りました。それはユダヤ人にもクリスチャンにも多くの影響を与えたユダヤ人の哲学者であり、神学者でもあり、ラビの一人でもあったアブラハム・ヨシユア・ヘシエル(1907～1972)という方による見解です(「イスラエルー永遠のこだまー」1996年、ミルトス社)。この本のあとがきにヘシエル氏についての説明があります。それによれば、彼はワルシャワ生まれ。ナチスの迫害を逃れて米国に渡り、生涯ずっと米国で活躍した 20 世紀最大のユダヤ哲学者で、ユダヤ教神

イエルーシャーライム

יְיִ שָׁלוֹמִים

### セッション 3

学者の一人に数えられ、ハシティズム(ユダヤ教敬虔派)の伝統的な家庭で、幼児期よりユダヤ教の徹底的な学習を始め、十歳の頃には旧約聖書を全巻すべて覚え、さらにタルムードやカバラ(神秘主義)をマスターしたと紹介されています。

●ヘシエル氏の見解は以下の通りです(上記著書 42~43 頁)。訳文どおり引用します。

「町の名エルシャライムには、どんな意味があるのだろうか。この町は初めシャローム(サレム)ー平和(創世記 14:18)と呼ばれていたが、後にアブラハムがエレと名づけた。「これにより、人々は今日もなお『山の上にヴィジョンあり』と言う」(創世記 22:14)。エルシャライムは、この両方の名をつなげたものだ。エルとシャローム、「ヴィジョン」と「平和」・・・」

●ここで私が驚いたのは、創世記 22 章 14 節の訳を「山の上にヴィジョンあり」としていたことです(訳文が正しければ)。つまり、「アドナイ・イルエ」の「イルエ」を「ヴィジョン」と解釈していることです。なぜそのように解釈できるのかと言えば、その箇所の内容を見ると分かるように、「アドナイ・イルエ」(הוהי הָאֵלֵי?)の「イルエ」(הָאֵלֵי?)が、「(主が)ご覧になった」という意味だからです。

●創世記 22 章はアブラハムの最大の試練が記されている有名な箇所です。そこには、「見る」という動詞「ラーアー」(הָאֵלֵי)がなんと四回も使われているのです。神から「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。・・・全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい」と命じられて、アブラハムは神がお告げになった場所、すなわち「モリヤの地」に出かけました。4 節に「三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた(「ラーアー」הָאֵלֵי)とあります。「モリヤの山」とは「エルサレム」のことです。アブラハムと一緒に出掛けた息子のイサクは父に尋ねます。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか」と。その問いに対して父アブラハムは「神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えて(原文は「見つけて」הָאֵלֵי)くださるのだ」と答えます(8 節)。彼らがモリヤの山に着いて、父アブラハムが息子のイサクをほふるうとしたとき、主の使いが天から彼を呼び、「手を下してはならない。」と止め、アブラハムが神を恐れていることを確認しました。そして、アブラハムが目を上げて見る(「ラーアー」הָאֵלֵי)と(13 節)、そこには角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいたのです。そこでアブラハムは、その場所を「アドナイ・イルエ」と名づけました。そこで、今日でも「主の山の上には備えがある」と言い伝えられている(14 節)とあります。

●「主の山の上には備えがある」(新改訳)の直訳は、「主の山において主がご覧になる」です。これがヘシエル氏の言う「主の山(=エルサレム)にはヴィジョンがある」という意味になるのです。そして、これが「エルサレム」(イエルーシャーライム)の「エル」(イエルー)の意味だとしています。それに「エルサレム」の後半の部分である「サレム」が結び合わされています。前にも記したように、「サレム」は神の祝福の総称を意味する「シャーローム」(שָׁלוֹם)の複数形「シャーライム」(שָׁלוֹמִים)です。つまり、「エルサレム」という町(都)の名称に秘められているのは、「神のヴィジョン(ご計画)とそこにある神のすべての祝福が注がれるところ」だということです。このように、ヘシエル氏の見解は、エルサレム(イエルーシャーライム)が神の聖なる歴史の満ち溢れた中心的な場所であり、神の永遠のご計画における重要な鍵語であることを示唆

### セッション 3

しています。

●さらに付け加えるならば、創世記 22 章 2 節には「愛する」という動詞が聖書で初めて登場しています。「あなたの愛しているひとり子イサクを連れて」とあるように、アブラハムの試練は「愛する」(「アーハヴ」**אהב**)ことがどういことかが試されたようにも見受けられます。イサクが父アブラハムに従順に従ったように、「神が見ておられるヴィジョンを私たちも見、それに従い、それに参与すること」が「愛する」ことであるというメッセージが込められているように思われます。つまり、「主の山には備えがある」とは、「神に従うなら、すべての必要が備えられる」という意味ではないことが分かります。こうしたことを通して、「ヘブル的な視点から聖書を読む」ことがどういことかが示されます。また、「シャーラーム」の動詞の「シャーレーム」(**שלם**)には「完成する」という意味もあります。したがって、「エルサレム」は「**神のヴィジョンが完成するところ**」とも言えるのです。

## 2. エルサレムに対する神の漸次的啓示

●神のヴィジョンとは、神が選ばれた聖なる都エルサレムにおいて、**神と人が永遠にともに住む**ということとです。そのことが歴史の流れの中で漸次的に啓示されています。



- (1) 「エデンの園」では、神と人(アダムとその妻)が交わりを持っていました(創世記 3:8)。
- (2) 「シャレム」(=サレム)の王メルキゼデクが突然に現われ、アブラムを祝福しました(創世記 14:18~20)。
- (3) 「モリヤの山」(=エルサレム)でアブラハムは信仰の試練を受けます。主はイサクの代わりとなる一頭の雄羊を備えられました。アブラハムはその場所を「アドナイ・イルエ」と名づけました。
- (4) ダビデが全イスラエルの王となって最初にしたことは、エルサレムを首都としたことです。ダビデはエルサレムのシオンの丘に契約の箱を運び込み、新しい礼拝を始めました。これが「ダビデの幕屋」と言われるものです。ユダヤ人は「フッパー」という天蓋を作って、その下で結婚式を行ないますが、それは神の幕屋が人とともにあることの「写し」なのです。
- (5) ソロモンはエルサレムに壮大な神の宮(神殿)を建てました。そして最大の領土を獲得します。しかし、ソロモン以後、全イスラエルは分裂し、北イスラエルは全世界に離散しました。しかしメシア王国

## セッション 3

では、全イスラエル 12 部族がメシアによって全世界から集められ、エルサレムを中心として北と南に、新しいパターンによってほぼ均等に、嗣業としての土地を配分されます。

- (6) 神の民が神との契約を破ったことによって、エルサレムはバビロンによって破壊され、ユダの民はバビロンの捕囚となりました。
- (7) ペルシャの王クロスによってエルサレムへの帰還が許された民は、エルサレムに神殿(第二神殿)を再建しました。
- (8) 神の御子イエシュアはエルサレムで苦しみを受け、エルサレムの郊外にあるゴルゴタで十字架に掛けられ、死なれました。しかし三日目に復活したあと、40 日目にオリーブ山で昇天されます。50 日目に、約束の聖霊が降臨して教会が誕生します。エルサレム教会から福音が伝えられ始めます。
- (9) エルサレムは A.D.70 年にローマ軍によって破壊され、ユダヤ人は世界に離散を余儀なくされました。
- (10) 教会が携挙された後に、神の民であるユダヤ人は反キリストによる支配と大患難を経験します。反キリストはエルサレムの神殿(第三神殿)において自分が神であることを宣言します。
- (11) ハルマゲドンの戦いの後、エルサレムは破壊されます。
- (12) イスラエルの「残りの者」たちが避難先のボツラで民族的に回心した後、キリストはエルサレムの東のオリーブ山に地上再臨されます。反キリストと偽預言者は燃える火の池(ゲヘナ)に投げ入れられ、サタンも底知れぬ所に幽閉されます。そしてメシア王国が千年の間地上に実現します。千年の終わりにサタンの幽閉が解かれた後、最後の審判が行われ、主にある者たちはそのまま新しい天に準備されていた「新しいエルサレム」へと移されます。いのちの書に名の記されていなかった者たちはサタンと同様に燃える火の池に投げ込まれます。その前に古い地と天はあとかたもなくなります。
- (13) 「新しい天」にあった「新しいエルサレム」が、「新しい地」へと降りてきます。「新しいエルサレム」とは神と人とが共に住む神の幕屋であり、永遠に続く御国です。

●このように、アブラハム、ダビデ、そしてイエシュアを貫いている鍵は「エルサレム」なのです。しかもそこはメシア王国のセンターであり、次のステージである天から降りてくる「新しい都エルサレム」の舞台でもあるのです。その内実は、かつてエデンの園にあったものが回復されると言うてよいでしょう。「エデンの園」は「新しいエルサレム」と同義なのです。神の救いの歴史において、神が常にこだわり続けているのが、「エルサレム」であり、「エデンの回復」です。そしてそれが神のマスタープラン(神の不変のご計画)であり、それが必ず実現するというのが「御国の福音」(御国の良きおとずれ=Good News)なのです。「神の国はあなたがたのただ中にある」(ルカ 17:21)とイエシュアは言われましたが、それは今日、まだ「からし種」程度のもので、種であったとしても、やがては大木ほどに成長するのです。

### 3. 「新しいエルサレム」のヴィジョン

●注目すべきことに、メシア王国の後に来る「新しいエルサレム」「聖なる都エルサレム」は**立方体**で、その規模は一辺がそれぞれ 1 万 2 千スタディオン(2,220km)です。その広さは日本の全域を包み込んでしまうほどの規模で、それはエルサレムを中心とする神が約束された地域とほぼ重なります。それが新しい天か

## セッション 3

ら新しい地に降りて来るのです。地上のどこに降りて来るかと言えば、それは少なくとも、エルサレムを中心としているはずです。おそらく聖書の舞台が中東であることから、下の図が参考になるかもしれません。

### (1) アブラハムに対する主の約束

【新改訳改訂第3版】創世記 15章 18節

その日、【主】はアブラムと契約を結んで仰せられた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大川、ユーフラテス川まで。

### (2) アブラハムが旅した範囲

●アブラハムがその生涯において旅をした範囲は神のご計画に基づいています。彼は神に召し出されてウルという地からユーフラテス川のハランに行き、そこから、カナンを通してエジプトにまで旅をしています。そこからリターンし、やがてはモリヤの山(エルサレム)で神のヴィジョンを見せられました。ヘブル書によれば、アブラハムは「**堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた**」とあります(ヘブル 11:10)。その「都」とはメシア王国でのエルサレムとも、あるいは、ヨハネの黙示録 21章にある、神によって設計され、建設される「新しいエルサレム」のこととも言えます。アブラハムは信仰によってそれを待ち望んだのでした。信仰の父と言われるアブラハムにふさわしい、「見ずして信じる信仰」という何と大きなスケールでしょうか。

### (3) ソロモンが支配した地域

【新改訳改訂第3版】Ⅱ歴代誌 9章 26節

彼は大河からペリシテ人の地、さらには、エジプトの国境に至るすべての王を支配していた。(ここでの大河とは、北のユーフラテス川です)

### (4) イザヤの預言

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 19章 23~25節

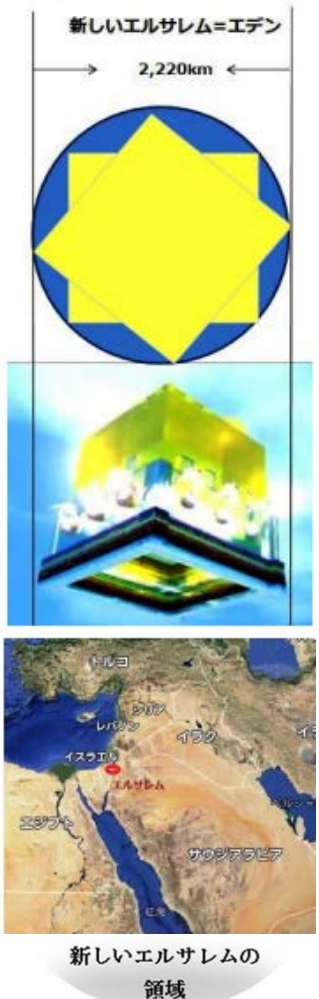
23 その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人はアッシリア人とともに主に仕える。

24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリアと並んで、第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。

25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手をつくったアッシリア、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

●イザヤ書 19章のこの預言は、中東の扉を開いてエジプトとイスラエルとアッシリアを結ぶ大路を造ると

立方体の一辺が12000スタディオン=2,220km





### セッション 3

いう神の終末のご計画です。神は中東のアラブ人とユダヤ人を和解させ、地上の祝福とされるということです。なぜなら、アラブの祖先であるイシュマエルを産んだ母ハガルを主は見守っておられるからです(創世記 16:10~13)。神の思いは私たちの思いと異なり、神の道は私たちの道と異なるのです(イザヤ 55:8)。ハガルは自分に語りかけた主の名を「あなたはエル・ロイ(私を見守られる神)」と呼びました。

●ユダヤ人とアラブ人(イスラム)の共通の祖先はアブラハムです。そのアブラハムの本当の息子はだれかをめぐって、「トーラー」ではイサクが真の息子であるとし、「コーラン」ではイシュマエルだとしています。そもそも民族的アイデンティティを異にしているわけです。それゆえ、常に「敵対関係」にあるのです。特にこの「敵対関係」はイスラエル建国(1948年)以降、より顕著になっています。そこに人間的な工作によって両者の和平を作り出すことは、「トーラー」と「コーラン」を混ぜ合わせて一つにするようなものであり、不可能です。神はメシアなるイエシュアによってのみ、ご自身の御計画を実現されるのです。

●メシア王国における世界の中心は「エルサレム」です。エゼキエルは、メシア王国においてエルサレムが「主はここにおられる(原文は「そこに」)」を意味する「アドナイ・シャーンマー」(יהוה שׁמֶר)と呼ばれるようになると預言しています(エゼキエル 48:35)。またゼカリヤは、主の御名が「唯一の御名」(「シエモー・エハード」יְהוָה יְהוָה)となると預言しています(ゼカリヤ 14:9)。

#### 4. 主がエルサレムの城壁に置かれる見張り人

●続いて、同じくイザヤ書の 62 章から、エルサレムの城壁の上に置かれた「見張り人とその務め」について取り上げてみたいと思います。神のご計画における「終わりの日」が近づくにつれて、いろいろなところからこの務めをする者たちが起こされると信じます。「御国の福音を待ち望む」ことと、「エルサレムの見張り人とその務め」とは同義です。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 62 章 6~7 節

6 エルサレムよ。わたしはあなたの城壁の上に見張り人を置いた。昼の間も、夜の間も、彼らは決して黙ってはいならない。【主】に覚えられている者たちよ。黙りこんではならない。

7 主がエルサレムを堅く立て、この地でエルサレムを栄誉とされるまで、黙ってはいならない。

##### (1) 「見張る」という語彙

●ここで語られているのは、神である主がこだわり続けている「エルサレム」に対してです。「見張り人」とはどんな人のことを言うのでしょうか。またその務めとは何でしょうか。ヘブル語で「見張る」という意味を持つ語彙が四つほどありますが、その中で使用頻度が 469 回とダントツに多いのが、「シャーマル」(רָמַץ)です。この語彙が聖書で最初に使われているのは創世記 2 章 15 節で、エデンの園において「耕す」ことと「守る」ことが最初の人アダムに与えられた務めでした。神のヴィジョンの完成がエデンの園の回復

## セッション 3

であるとするなら、当然、最初の人に与えられた働きは今も神のみこころにかなっているはずで

●ちなみに、イザヤ書 62 章 6 節に使われている「見張り人」は、動詞「シャーマル」の分詞形です。この務めは「神からの召しであり、継続的な務め」であるという意味において、「守る」という面が強調されています。自分の気の向いた時にすれば良いという務めではなく、24 時間体制の使命的自覚が求められる務めです。ですから、神からの召しがなければ、到底できない務めと言えるでしょう。そして、神のヴィジョンについて、人を恐れることなく語らなければなりません。決して黙ってはいならない務めだということです。

### (2) 「見張り人」が見張るべきこととは何か

●「見張り人」が見張るべきこととは、神のマスタープランとも言うべき神のご計画であり、「エルサレム」という場において実現される「御国の福音」です。メシアの地上再臨によって実現される「良きおとずれ」です。このことにひとたび目が開かれると、聖書が語っているメッセージの骨子はまさにこのことだと確信できるのです。聖書の中の数多くのピースがこの骨子を中心にして散在しています。「御国の福音」が聖書の主題であると確信し、それを伝えるためには、それを論証するための備えが必要になって来ます。つまり、相当量の聖書の勉強が必要となります。使徒パウロがエペソの教会の人々に宣べ伝えたのは、この「御国の福音」であり、パウロは主が置かれた「見張り人」の一人でした。

●聖書全体に流れている主題とはいったい何か。たとえば、私が卒業した「きよめ派」の神学校では、「ホーリネス」こそ聖書全体を貫いている主題であるということ、様々な領域から検証し、論証しています。そうすることで教団としてのアイデンティティが樹立するのですが、そこで学んだ者にとっては、ひとたび構築された神学(=理解の型紙)から抜け出すことは容易なことではありません。なぜなら「理解の型紙」が聖書を解釈していくひとつの「道しるべ」ともなっているために、それを自ら打ち破ることは相当の確信と勇気が必要となります。場合によっては、神学的戦いを余儀なくされるでしょう。

### (3) 「御国の福音」への気づき

●2014 年の 2 月に、私の所属する連盟の牧師会がもたれました。私は使徒の働き 20 章から、「神の恵みの福音」と「御国の福音」があることに気づかされたので、そのときの「霊性の回復セミナー」でそのことを扱いました。「神の恵みの福音」は「和解の福音」とも「十字架の福音」とも呼ばれますが、「御国の福音」について、私はそれまで盲目でした。前者と後者の区別がついておらず、混同していたのです。その混乱の原因の一つとして、伝道至上主義による聖書解釈がひとつの理解の型紙となっていることに気づき始めました。そして、初代教会の福音の理解と使徒パウロの福音の理解には二つの面があること。つまり、「御国の福音」の中に「神の恵みの福音」が位置づけられていることに気づかされ始めたのです。福音を伝えて行く場合に重要なのは個人の救いの体験、個人の信仰の**あかし**です。これはイエシュアの「十字架の恵みの福音」のもつ性格と言えます。罪の赦しの確信、神の子どもとされた確信、自分中心ではなく神中心の生き方をも



## セッション 3

たらず神の愛と恵みの経験を目に見える形に、すなわち生き方であかししていく必要に迫られるのです。しかし、「御国の福音」はあかしできません。なぜならそれは私たちがまだ体験しておらず、将来に約束されたものであるからです。また、私たち一人の生涯をはるかに超えて働かれる神のご計画とその実現についての内容だからです。ですから、神の約束をあるがままに信じることであり、また独りよがりではなく、聖書によって**論証**することが求められます。使徒パウロは、エペソの教会を建て上げて行く上で、「神の恵みの福音」をあかしすると同時に「御国の福音」を語り続けました。そこに私たちは注目しなければなりません。

●キリスト教会はこれまで、クリスチャンに対して、自分が経験した「神の恵みの福音」をあかしする (**testifying**) ことを教え、促してきたと思います。単なる知識ではなく、生きたあかし人となることを勧めてきました。それは正しいことであり、間違っはおりません。しかし見落とししてきたものがあるのです。それが「御国の福音」を宣べ伝え (**preaching**)、教え伝える (**teaching**) ということです。「御国の福音」は「神のご計画全体」におよぶ鳥瞰的な内容を含んでいます。しかもパウロは、それを「余すところなく知らせておいた」と述べています。「余すところなく」とは、「退くことなく、ひるむことなく、避けることなく」という意味です。説明することが難しいという理由で、語ることを「ひるんだり、避けたりはしない」とパウロは語っているのです。見知らぬ土地でも地図を持って歩くなら迷わずに済むように、神のご計画の鳥瞰的視点が聖書の正しい理解を支えてくれると信じます。

### ベアハリート

●「御国の福音」はそもそも、イエシュアがイスラエルの民に向けて語られた福音です。この福音は、旧約のアブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約などが、預言者たちの語った「その日」「終わりの日」に、メシアの統治によってはじめて実現し、完成する福音です。しかもそれはこの地上において目に見える形で実現します。つまり「御国の福音」は、イエシュアの再臨によって実現する「メシア王国」(千年王国)であると同時に、黙示録 21~22 章に描かれている最終ステージとしての「永遠の御国」(新しいエルサレム)とも言えるのです。聖書の全体像を視野に入れて常に語り続けることは容易なことではありません。なぜなら、それは私たちが今置かれている現実にとぐわないように思われるからです。しかし信仰の父アブラハムを思い起こしましょう。神が設計し建設される堅い基礎の上に建てられた都を彼が待ち望んだように、私たちの行き着くべきところをしっかりと描くことができるなら、私たちに与えられている望みはより確かなものとなっていくはずで

●使徒ペテロは、「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」(Iペテロ 3:15)と述べていますが、ここに「見張り人」としての召しが語られているのではないのでしょうか。「エルサレム」は神のご計画とみこころの中心にある重要な鍵です。詩篇に「エルサレムの平和のために祈れ。」(122:6)とありますが、それは神の歴史が「エルサレム」を中心として展開し実現するからです。神のヴィジョンの完成に目を留める「見張り人」は、終わりの日が近づくにつれて、神によって、より多く、いろいろなところから起こされてくると信じます。